平成２９年度第２回千葉県地域リハビリテーション協議会
開催結果概要

１　日　時　平成３０年３月１４日（水）　午後１時３０分～３時１０分
２　会　場　千葉県教育会館　２０３会議室
３　出席者　協議会員総数１６名中１４名出席
荒井泰助氏、石山明子氏、岩本明子氏、上田知成氏、児玉賀洋子氏、小宮あゆみ氏、寺口惠子氏、戸村由美子氏、滑川佳奈恵氏、平山登志夫氏、茂木優希氏、山崎潤子氏、吉永勝訓氏、李笑求氏（５０音順）

４　会議次第
（１）開会
（２）あいさつ
（３）議題
ア　平成２９年度千葉県リハビリテーション支援センター及び地域リハビリテーション広域支援センターの活動結果について
（４）報告
ア　次期「千葉県保健医療計画（リハビリテーション対策）」について
イ　「ちば地域リハ・パートナー」の指定状況及び「千葉県地域リハビリテーションロゴマーク」の利用状況について
ウ　地域リハビリテーション出前講座の実施結果について
（５）その他
（６）閉会

５　会議結果概要
（１）あいさつ
事務局の髙岡健康づくり支援課長よりあいさつ
（２）議題
ア　平成２９年度千葉県リハビリテーション支援センター及び地域リハビリテーション広域支援センターの活動結果について
県支援センター及び各広域支援センターより資料１を用いて説明があった。
＜荒井協議会員＞
県リハビリテーション支援センターに聞きたいが、今後も制度を周知してパートナーを増やしていく方向だと思うが、一貫性を持ってこういう風にパートナーを活用していこうというような考えはあるか。
＜県支援センター（千葉リハビリテーションセンター）＞
広域支援センターと意見交換している中で、パートナーとして手挙げがあったものの、質の担保が難しいという話があるので、質の統一を図るように努めていきたい。
具体的な事業では、市町村からの依頼に応えていけるようにすることと、例えば「介護予防」という切り口でもっていくと、それならやってみたいという動きもでてくるので、まずは１つの軸を立てて、事業提案をしていきたい。
また、介護予防事業ということで動いたところ、パートナーに対しての費用補填をする市町村も出てきている。１回いくらという費用補填についても整理していきたい。
＜吉永会長＞
事務局から何か補足はあるか。
＜事務局＞
このあと開かれる担当者会議での意見も聞きながら、パートナーの活用について検討していきたい。

＜茂木協議会員＞

千葉中央メディカルセンターに聞きたいが、重点活動項目としてケアマネージャーを対象とした研修会があるが、①どのような内容の研修会か、②どれくらいの人数が参加したか、③参加者がどのような感想を持ったか、について教えていただきたい。

＜千葉地域広域支援センター（千葉中央メディカルセンター）＞

この研修会は、昨年度の協議会での御意見や研修会参加者からのアンケートから、引き続き実施した方が良い内容と考え実施したものである。

研修会の内容としては、まず在宅リハを導入するにあたり、理学療法、作業療法、言語療法の違いから話をしなければいけないので、職種の違いからの講義となった。講師は作業療法士で、ケアマネージャーの方と意見交換しながら進めた。

また、高次脳機能障害や認知症などコミュニケーションのとりづらい方を想定して、グループワークを行った。

参加者は 35 名ほどである。

参加者からの感想では、理学療法と作業療法の違いがわかったとか、どういうコミュニケーションをとれば良いかがわかったというものがあった。

＜茂木協議会員＞

地域リハの推進の中にも、ケアマネージャーの役割があると思う。ケアマネージャーの中にも専門職の職域を理解していない方もいると思うので、是非、他の圏域でもケアマネージャーを巻き込んだ取組をお願いしたい。

＜小宮協議会員＞

君津中央病院に聞きたいが、活動実績に特別支援学校非常勤講師とあるが、これはパートナーが出たものか、病院の方が出たものか。また、ボランティアで出たのか、学校の非常勤講師枠で出たのか。

＜君津地域広域支援センター（君津中央病院）＞

当院の作業療法士が学校の非常勤講師枠で出たものである。

＜上田協議会員＞

九十九里病院に聞きたいが、活動を始めて１年目でありながら、これだけ多くの依頼がきている。やはり直接、足を運んで伺って行ったことが大きいのか、どのように分析しているか。

＜山武長生夷隅地域広域支援センター（九十九里病院）＞

挨拶まわりをした際にアンケートを配布した。この中で、リハ職との連携の必要性や度合いなどを聞き、リハ職との連携に希望のあった市町村には再度声かけをした。

活動実績は、当院主催の事業というより、そのほとんどは市町村や社会福祉協議会からの依頼を受けての事業だった。

（３）報告

ア　次期「千葉県保健医療計画（リハビリテーション対策）」について

資料２を用いて事務局より説明。

＜吉永会長＞

今年度の保健医療計画の見直しにあたっては、地域リハの事業が正式に盛り込まれたこと、そして記載内容もだいぶ増えたところは良かった。

施設の老朽化に係る記載が修正されたことについては、もう１つの背景として千葉リハの建て替えが今年度、正式に決まったことが影響していると思われる。

イ　「ちば地域リハ・パートナー」の指定状況及び「千葉県地域リハビリテーションロゴマーク」の利用状況について

資料３を用いて事務局より説明。

＜吉永会長＞
今後、パートナーの募集というのは、定期的にやっていくのか、募集期限は切れていないのか。
＜事務局＞
期限を設けていないので、募集自体は今も生きている。
やはり一斉通知で個別通知をした方が募集効果は高いが、頻繁にやるわけにもいかないので、通常期は研修会やホームページ等でアナウンスをすることとし、しばらく実績を積んでから、こういった活動ができるということを合わせてお知らせする形で、再度一斉通知することも考えている。
＜荒井協議会員＞
地域包括ケアを進めていくなかで、リハの団体が各地で立ち上がったり、代表の方がこういう話し合いの場にも出ていくようになってきている。
先ほど、市町村によってはコスト補填がつき始めているという話があったが、市町村はあそこがやっているならうちもと言うように横並びで考えることが非常に多いので、コスト補填についても情報共有していくと、この取組がより進んでいくと思う。
＜事務局＞
パートナーの費用は、地域リハの事業ではつけていないので、御指摘のとおり市町村が予算をつけていくことは、この取組を進める上で重要なことだと考えている。
情報共有を進めて、市町村が良い方向に動いていくようにしていきたい。
＜吉永会長＞
当初、費用がつかないのでパートナーに手挙げする団体がいるか心配という声もあったが、100 を超える団体が指定されて大変ありがたい。
協議会員の皆様からも関係する団体に是非、声かけをしていただければ、また取組が進んでいくことになるので、御協力をお願いしたい。

ウ　地域リハビリテーション出前講座の実施結果について
資料４を用いて事務局より説明。
＜荒井協議会員＞
学校への周知は、毎年、全学校にやっているのか。
＜事務局＞
周知方法としては、健康づくり支援課から教育庁指導課と市町村教育委員会を通じて各学校に周知しており、毎年出している。
＜滑川協議会員＞
アンケートには、とても良いことばかりが書いてあるが、ネガティブな感想はなかったのか。
＜事務局＞
教員から「学校現場は忙しいので、備品の調達はやってほしい」というもののみで、このほかには児童の感想を含めても特段なかった。
＜吉永会長＞
出前講座を実施した側からネガティブなものはなかったか。
＜県支援センター（千葉リハビリテーションセンター）＞
モグラたたき的な事業になっており、手上げをしたところに講座を実施している。このためアウトカムがどれだけ出ているか評価が難しい。
今後の実施方法として、社会福祉協議会でも同様の取組があるので、こことタイアップする方法や、学校の先生にアプローチする方法など、効果的な実施方法を検討しているところである。

講座の実施主体は、１年目は県支援センターで行い、２年目は広域支援センターとパートナーに積極的に参加していただいた。講座を実施しているときの高揚感はあるが、事業効果がどれくらいあるかなど、その評価方法が難しい。

＜石山協議会員＞

いい取組だと思うが、リハビリテーションと介護の違いについて、児童に対して触れてはいないのか。

大人になるとここの違いはわかってくるが、児童では車椅子を使ったり、洋服の着かたを知ったりという体験の中で、リハビリテーションと介護を混同してしまうことはないか。

＜県支援センター（千葉リハビリテーションセンター）＞

学校の福祉授業では、お世話をするというところが切り口になっており、高齢者や障害のある人という、いわゆる弱者の視点で考えるものが多い。

リハビリテーションではそうではなく、例えば着替えの方法を扱っているのは、片手でもこうやれば着替えが１人でできるようになる、自分たちでもできるんだということを知ってもらいたい。「お世話型」ではなく「自立支援型」、その人の環境を変えるだけで、お手伝いがなくても自分たちで動けるようになるということを伝えている。

また、２年目のプログラムからは、PT・OT・ST の職種の紹介を取り入れた。

これは学校側から「児童に体験をさせたい」という声が多く、「体験」のみが目的になってしまうことを防ぐねらいもある。

地域リハビリテーションをどう伝えるか、これまでの福祉教育との違いを出すというところで、PT・OT・ST の職種を切り口にして実施したものである。

今後は、地域リハビリテーションとしてどうやるか、福祉教育としてやるか、タイアップしてやるかなど、効果的な方法を検討していきたい。

＜吉永会長＞

小学生へのアプローチという点では、安房圏域において従前から文化祭等で実施していると思うが、今後の取組について何か意見はないか。

＜安房地域広域支援センター（亀田総合病院）＞

小学校・中学校・高校など、ターゲットに合わせた授業を実施してもいいのではないか。また、学校の先生方や家族の理解など、周りの人の理解も大事である。

以前、子どもたちに行ったアンケートでは、「かわいそう」とか「私はなりたくない」といった感想もあったので、「何を伝えていくか」が大事である。

社会福祉協議会は「福祉」の視点で実施していると思うが、それと地域リハビリテーションとは視点が違うと思うので、地域リハビリテーションで何を伝えるか、子どものアンケートにどういったことが書かれていれば、この出前講座は良かったと言えるかなどを考えて進めることが大事である。

＜吉永会長＞

事務局には、こういった意見を踏まえて今後も取組を継続してもらいたい

（４）その他

事務局より、平成３０年度第１回協議会については、平成３１年度以降の指定に向けた広域支援センターの選定時期であることから、９月に開催予定である旨説明。